

都市山の共同管理の実態と課題：神戸市北区下唐櫃地区の事例から

兵庫県立大学経済学部 三俣ゼミナール

代表 柴田 将八

鴨志田 建太 川添 拓也 篠原 有加里 曾根 奏美 西 愛由圭
福永 沙羅 前畑 勇弥 柳川 恵理子 山本 敦士 吉田 遙香

1. はじめに

都市、神戸において六甲山というといわゆる「海手」に隣接する山林が想像されがちである。しかし、六甲山の「山手」には広大な森林が広がっている。

その山手に広がる森林は人工林化されているところも多く、そのような人工林のなかには、年数回、集落の人たちが人工林施業に必要な労働を提供する「村の出役」を通じて守られてきた林野がある。以下で取り上げる下唐櫃集落もまた今もなお、村の紐帯を基礎とした「村の共同性」によって運用され守られてきた共有林野である。しかし、石油等による生活様式の変移や長らく続く林業不況化にあって、そのような仕組みを維持することは難しくなりつつある。兵庫県の木材市場価格が右肩落ちの推移をたどってきたことからそれは理解できる（図1）。そのような外部要因たる市況の変化に対応するには、村内での協働はもとより、外部組織・団体と積極的に協業関係を築いていくことが重要になってくる。本研究は、聞きとり調査を通じ、村の状況、とりわけ都市近郊林にあつての困難や利点を明らかにしようとするゆえ、そこから得られる知見は六甲山系の他所地においても示唆を与えうると考える。

2. 調査目的

神戸市北区下唐櫃地区において林業実習及び聞き取り調査を通じ、六甲山系の一部をなす下唐櫃地区の人工林がどのように利用・管理されているのかを明らかにするとともに、現在直面している課題とその原因を考察する。

3. 調査方法

調査方法は、①文献調査、②フィールド調査の2点である。

①について、文献は『下唐櫃の歴史』（下唐櫃まちづくり協会 平成23年）を使用した。文献調査により下唐櫃地区及び森林組合の歴史について研究した。また、兵庫県立大学経済学部所属の三俣学准教授に森林の間伐の重要性及び入会林野の歴史と現状について講義を受け理解を深めた。

②のフィールドワークについて、

- ・日時 平成26年11月15日 午前10時より
- ・場所 兵庫県神戸市北区有野町唐櫃下唐櫃地区

- ・内容 1. 林業体験実習
- 2. 聞き取り調査

以上の概要で行った。聞き取り調査の対象は、森林組合前組合長・森林組合山林部長・下唐櫃婦人会である。対象にした理由は、①下唐櫃森林組合に詳しい②森林について詳しい③地区に住む住民である 以上の3点である。

また、フィールドワークの前に2度の下見を行った。下見の目的は①本番での調査を円滑に進める為②聞き取り調査での質問項目をさらに充実させる為の以上2点である。下唐櫃森林組合の皆さんに、林業体験実習予定候補地に案内を得た。2014年夏の集中豪雨の影響により、風呂谷・黒岩地区、他の山林およびその林道で土砂崩れ・倒木被害が発生していた。そして、人の手が足りず何か所もそのままにされている現状を確認した。

4. 現地調査結果

4-1・林業体験実習(午前)

林産組合の方々の指導を受け、実際に下草刈り(木の下に生えている雑草を鉋で刈る)・枝打ち(幹の下のほうの細い枝を払って木に栄養がいきわたるようにする)・チェーンソー体験をした。このような体験を通じ、林業には専門知識・経験が必要であること、また森林整備を継続して行うことのむずかしさを知るとともに、下唐櫃の人工林は依然として手入れが必要であることを実感した。



写真1 下唐櫃林産組合員の指導を受けての林業体験の様子

4-2・聞き取り調査(午後)

午後からは、下唐櫃林産組合の方々をはじめ、唐櫃の山に間接的に関係性を有する婦人会、消防団の方々にも聞き取り調査を実施し、現状把握を行った。以下、聞き取り調査の結果を項目順にあげていく。

① 森林構成

人工林 30%(うちスギとヒノキの比率は約 50%ずつ)、雑木林 70%

② 手入れの現状

現在、新たな植樹はしていないため、スギやヒノキの撫育を続けている。手入れができていない木々がある程度成長してきているため、その木々の下草刈りの必要性は低くなりつつあり、間伐や枝打ちを主に行っている。以前はマツの植林・手入れもしていたが、現在は手入れを行っていない状況である。組合員の高齢化が進んでいるため、手入れは集落から近いところのみ行われる。山の頂上付近の手入れは行われていない。

③ 森林の現状

基本的に手入れ不足のため、樹木が密集した日光が差しこまない林分である。そのため、成長が妨げられ根がしっかりはっていない。これにより土砂災害が何件も起こっている。

④ 木材活用の現状

下唐櫃の林業は木材の市場価格が低い（図 1）ことと、下唐櫃では林道が整備されておらず木材市場も近くにないことから、搬出費用のほうが高額となり採算が取れない。間伐してもそこで出てくる木材（間伐材）は活用されていない状況である。

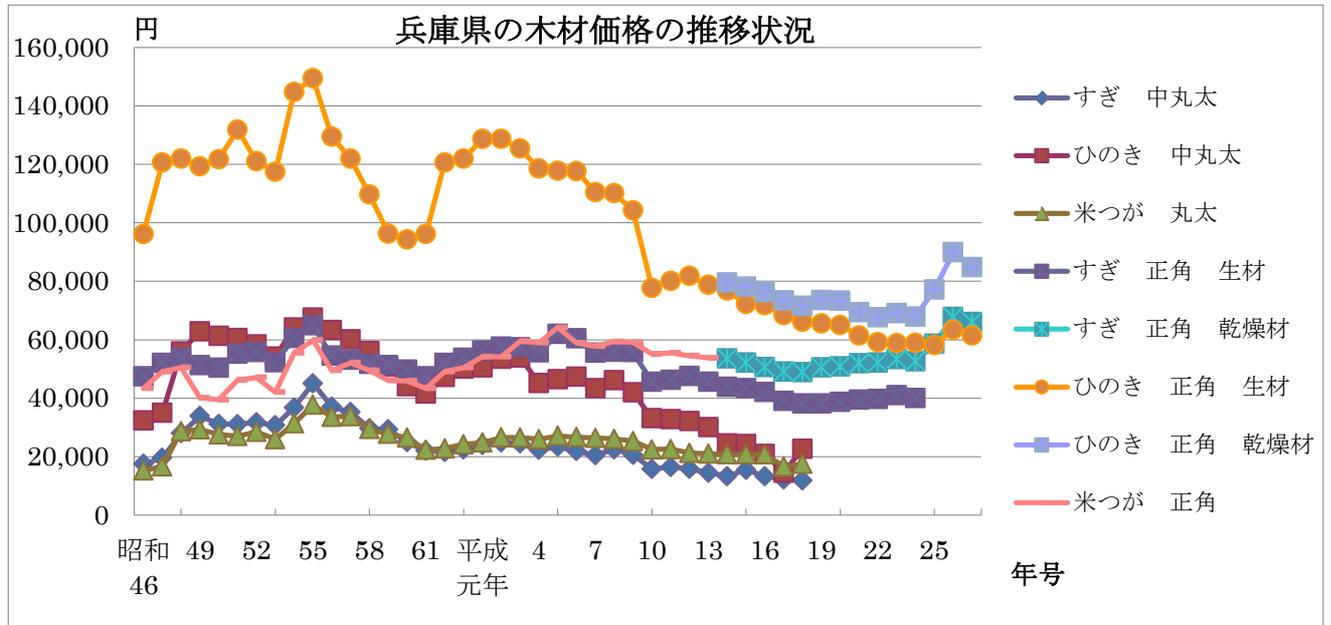


図 1 兵庫県立丹波年輪の里 HP『兵庫県の木材価格の推移：グラフ』を編集して筆者作成

⑤ 下唐櫃林産農業協同組合について

i. 設立

昭和 22 年。

ii. 加入世帯数

平成 26 年度の時点で 47 世帯。下唐櫃全域での世帯数は約 90 世帯であるため、下唐櫃全世帯における林産農業協同組合加入世帯数の割合は約 53% である。

iii. 加入者数

平成 8 年の時点で 205 人であり、平成 26 年現在は 184 人となっている。組合加入に関しては、家で継承していくシステムをとっている。新規加入を認めていないわけではないが、加入するためには様々な条件があるため、現在のところ新規加入の前例はない。子ども世代の人口流出が著しく、組合の活動を継承する跡取りがいないため、組合員数は次第に減少しているというのが現状である。

iv. 加入者平均年齢

平成 8 年の時点で 40.6 歳であり、平成 26 年度現在は 50.7 歳。過去 18 年で約 10 歳上



写真 2 下唐櫃林産組合員へ聞き取り調査を行う様子

昇しており、組合員の高齢化も見られる。

⑥お役（賦課）¹について

i. 回数・時期

各加入者あたり年に1回、11月から12月にかけて行われる。下唐櫃の地を上、上中、下中、下の4地域に分け、それぞれの地域ごとに年1回ずつ行う形をとっている。かつて植林をしていた時期には年に5,6回お役が行われていたが、現在は植林をしておらず手がかからなくなったこと、また組合員各自の勤務形態が多様化し、週末に何度も組合員を集めることが困難になったことを理由として、回数を減らし行われることとなった。

ii. 参加人数

お役の参加人数は各世帯1人で、不参加の場合は来年度に2回参加しなければならないというペナルティがあるが、参加率は毎年ほぼ100%を誇っている。それだけお役が組合員にとって身近なものであり、当たり前に行われてきたということである。

iii. 活動内容

お役の実際の活動内容としては、下草刈り、枝打ち、間伐が挙げられる。先述の通り、近年植林は行っていない。現在は2014年8月の集中豪雨による影響で森林が荒れてしまったため、その復旧作業を行なっている。活動時間はおおよそ朝8時から夕方16時となっている。作業の際に用いる道具は、組合が購入後、各組合員宅に預ける形をとっており、実際の活動の際にはのこぎり、なたなどの道具を各組合員が手入れをして臨む。チェーンソーは山林部長である西向氏宅で保管している。

iv. 日当

お役を行うにあたり、組合から組合員へ日当が渡される。男性は8000円、女性は7000円と男女間で差があるが、これは作業効率に差が出るためである。ただ、お役は重労働であるため、各世帯基本的に男性が参加することが多い。

5. まとめ

林業体験実習・聞き取り調査から得た知見の大要は大別して以下の4点に分けられる。

1点目は、組合所有の森林の整備が十分に行き届いていないことである。その原因は、スギやヒノキ材の市場価格の低迷による林業不況にある。同時に、林業に依存しない経済構造へ転換し、私有林はもとより、不参加によるペナルティー（不参賃）が発生する共有林のお役は、かつての年間5,6回から年間1回にまで低下している。このような状態が、加入世帯数低下・加入者数低下・加入者平均年齢の上昇という形で表れていると思われる。

2点目は、2014年8月の集中豪雨による被害が非常に大きいことである。林道が寸断された箇所や木が薙ぎ倒されてしまった箇所が多数存在するが、現在もほとんど整備されることなく、ほぼそのまま残ってしまっているというのが現状である。

¹本論文においてはお役（賦課）について、共有財産である森林を、各組合員が自分のものだと自覚を持ち管理するという意図のもと行われている森林管理活動のことと定義する。

3 点目は、お役が地域住民の懸命な努力のもとに続けられているということである。他地域ではお役が無くなってしまったところも数多くあるのに対し、下唐櫃地区においては同林産組合を中心とし継続されているという点は注目に値する。しかし、組合員数が減少している昨今、新たな加入者の不在は今後、問題になる可能性がある。また、組合員の減少により、祭りや清掃といった地区内行事の数・規模が減退・縮小していることもコミュニティ機能の維持という観点から懸念されることである。

4 点目は、下唐櫃のコミュニティとしての性格である。一般に閉鎖性を持つコミュニティには、地域内での強い繋がり、例えば、近所の顔がわかる暮らしや安全な暮らしが存在するというメリットが存在している。一方、上述した 3 点目とかかわるが、閉鎖的ということは新たな人材が入り辛いというデメリットも抱えている。これは森林を管理する人材

6. 考察—今後の展望と課題

私たちは聞き取り調査・体験実習で森林整備が行き届いていない現状を理解し、それが社会経済的な構造変化から生じているゆえ、下唐櫃の森林が次世代に健全な形で継承されないかもしれない厳しい状況に直面しているものと理解した。そして昨年同様、さらなる災害が起きた際に適切に対応できるのかということに危機感を覚えた。

また、先述の通り下唐櫃地域には新たに人は入っていない。聞き取り調査からのみの印象でいえば、人を新しく招き入れるような発想や試みの痕跡は見られない。また加入者数は減少の一途を辿り、高齢化は進んでしまっている。このような危機感から外部の人を呼び込むこと、それができなくとも、外部組織との連携を作り出す試みは現状を変える一つのきっかけになると私たちは考える。外部の人や団体との連携を築くにあたって、次の 3 段階があると考えられる。

第一段階として、森林の専門家や NPO を招致し、既存の組合員との交流を図ることを通じて、今後の組合有林の利用や管理の方向性について検討する。組合員の技術向上だけでなく「組合所有林の未来像を考える場」になるような機会を創出するのである。また、専門家・NPO と組合員のかかわりの中で、それまでにはなかったような意識の変化が組合の中でも起こるかもしれない。

第二段階として、そのような外部との連携基盤がある程度形成された上で、森林ボランティアや地域内外の森林に興味のある人材を呼び込み、森林作業を実施していく契機をつくる。そこでは専門家から得た知識等を元に組合員と森林ボランティアの協業の姿や、森林についてほとんど知識を持たない都市の人たちが彼らの指導を受けながら森林施業を行う姿も想像することができる。そういった森林ボランティア活動の持つ潜在力はすでに他地域で成果を上げている。そこで必要なのは「都市住民＝ボランティアを施す主体・農山村はボランティアを受ける主体」という構図転換である。森林ボランティア活動に参加する人たちは、森林の中で普段は得られないような体験や会話を楽しむことができる。そのうえ、自身のボランティア活動が公益にもつながるという「社会貢献や自己実現の満足感」をも引き出しうる。他方、近年注目されている「森の癒し効果」を最大に引き出すような

林内作業の内容などを外部組織や行政とともに考え、そのプログラムを実施していくことが有効になるかもしれない。ボランティアも含む多様な人たちが当該地域の森林に関わることができるようになれば、人手不足解消へ繋がることも期待できる。

第三段階目は、持続性に関わる要点である。それは子どもたちに地域の森林の歴史や林業技術を継承していく仕組みを作り出すことである。人手不足が少しずつ解消していけば、新たに人を呼び教える余裕も出来るかもしれない。今回私たちが実習したような経験を近隣の小学校や中学校の課外活動に取り入れてもらい、子どもたちに林業と親しんでもらうことは、森林に関心を持つ次代の人間を育むことになる。たしかに、林業施業はもとより、林内を歩くだけでもスズメバチに刺されるなどの「危険」は存在する。しかし、そのような危険の回避策をはじめ様々な協業に向かうアイデアを、地域の学校、大学などと検討し、実行に移す試み自体が、連携を生み出す契機になるのではないだろうか。子どもたちが森林と親しむ機会が増えれば、森林や林業に興味を持つ子どもたちを増やすことにもつながる。そのような工夫の積み重ねが、地域住民と森林との距離を近くし、両者をより密接にする。地域主導の工夫と取組みこそ、「持続可能な地域・森林づくり」への第一歩になると考える。

参考文献

- ・ 下唐櫃まちづくり協議会発行
『下唐櫃の歴史』、平成 23 年 3 月
- ・ 論文内資料画像

兵庫県立丹波年輪の里（2010）「兵庫県の木材価格(丸太・製材品)の推移：グラフ」, <http://nenrin.org/032suji/post_66.php>2015 年 2 月 26 日アクセス.より作成

謝辞

調査の趣旨を理解し快く協力していただきました下唐櫃林産農業協同組合のみなさま、下唐櫃婦人会のみなさま、神戸市有野支団第 5 分団のみなさま、心より感謝を申し上げます。研究成果の報告の場としては、四大学合同研究会（12 月 21 日：龍谷大学深草キャンパス）、兵庫県立大学環境経済研究センター主催の六甲山シンポ『森と健康』（2 月 21 日、三宮研修センター）の場を得ました。また、資金面においては、公益財団法人神戸市公園緑化協会から援助を受けました。ここに記して感謝します。